【ねがいましては】

平成２０年１月２８日　　*KYOWA SCHOOL*
第２０７号

「自分のこころ」

クイズ１、教師から「頭が腐っている」と言われ、３ヶ月で小学校をやめた人。こたえ・・・「エジソン」。そのほかに、「落ちこぼれ、または学校に行かなかった」、ノーベル（化学者）、リンカーン（政治家）、ディケンズ（小説家）、チャップリン（俳優）、ルソー（思想家）・・・日本テレビ知ってるつもり、学校ぎらいの天才たちより。

この本の巻頭での結びに、「いずれにしても、子どもの成長と将来の成功は、学校の成績という尺度だけで測れるものではない。いま、学校の成績至上主義と学歴社会の重圧に苦しんでいる日本の子どもたち・・・」とあります。

じつはこの本が出版されたのは、１９９２年です。１５年も前の本です。ではこの問題に今日１５年後、変化があったでしょうか。まったく変化していないのが現状のように思えます。それどころか、文部科学省の諮問機関である「中央教育審議会」は、学力向上のため授業時間を増やす方針を打ち立てました。絶対数を多くすれば効果が出るという判断で、はたして子どもたちに変化が現れるのか・・・？

でなくても、今の子どもたちは部活に勤しみ、朝練、午後練など、学校にいる時間はとっくに労働基準法を上回っています。当然先生方も越えています。

大人によって揺さぶられる子どもたちの昼間・・・。

さきほどの本の中に、教育学者の林竹二さんが、「教育という営為には、“教える”とともに“育てる”という要因があり、後者が根本的なものである、学校は子どもたちのためにあるのであって、教師たちのためにあるのではない」とかかれた部分を、『運命としての学校』より引用しています。

「成績」という２文字に完全に全身全霊を奪われてしまいがちになるのは、紛れもなく親。わかってはいるのだけれど・・・という方が多いのではないでしょうか。通知表のわずかな変化に、返却されたテストのバツの多さに一喜一憂するこころ・・・。

１５年間、なぜ変化がなかったのか。１５年というスパンよりもっと長い年月、変化がないのかもしれませんが、我が子の教育課程が終了すれば、まったくと言っていいほど学校に感心がなくなることを思うと、当然なのかもしれません。そこに変化がなかったことへの逃げ道のようなものがあるように思えます。

クイズ２、「資源に恵まれない国は、人材育成が国家の命運」と言って真剣に取り組んでいる国家。　こたえ・・・「フィンランド」　１月２４日付の読売新聞に「教育現場ルポ」と題して載っていました。でもこれ、資源に恵まれない国といったら、日本人の誰が聞いても「日本」というイメージを浮かべるはずです。この記事の中でも大きく取り上げられているのが日本とフィンランドの「学力格差」です。しかしもっとも大きなフォントで書かれているのは「どんな子も見捨てない」です。児童１２人に教諭１人という割合は強烈な印象を与えます。まさに国家ぐるみの取り組みがなされています。

その中の一節、「一部の秀才を育成するのではなく、特別学級も含め、少人数で子ども全員の学力向上を目指す教育理念だ・・・。」とあります。

同じ学力向上でも、この表現は「温かい思いやりをどの子どもたちにも十分に注ぐことが、必然的に学力向上へとつながっているのです。」と聞こえてくるのです。

また驚かされることは、学校間の平均学力格差が５％以内になっていることです。これは学校を選択するときに我々がついつい念頭に入れてしまう「偏差値」を必要としないということになります。学校を選択するときの基準が、学校の個性や活動内容になります。つまりどこの学校へ行っても手厚い教育を受けることができるということになります。

肝心な点は、子どもたちが学校にいるときの「こころ」にあると思います。たとえ短時間であっても、子どもたちの心が輝いていれば結果はついてくるはずです。勉強することの喜び、楽しさなど、低学年期から浸透させる必要があると思います。新学期、１年生たちは学校というところが何がなんだかわからない状態にあります。必ず湧き出てくる感情は「競争心」です。いつでも自分だけは優位にありたい・・・。勉強はその具体物として中心的存在になります。学校も親もそれを容認します。テストや通知表がその具体物になります。

「おかしいな、わかるってとてもうれしいことだし、みんながわかればいちばんいいことだと思うのだけれど、クラスでいちばん頭のいいＡちゃんは、なぜだれにも勉強おしえようとしないのかな・・・。」

思いやる気持ちや優しさを摘み取ってでも、成績が大切なのだと思わせてしまうのは誰なのでしょうか。

きれいごとなのかもしれませんが、真の学力向上というものは、子どもたちの心根が、思いやりや優しさに満ち溢れてこそスタートできるものだと信じます。

「先生、洗い物しておきますね。」といって、昨日私から真剣にしかられた中学生がスポンジ片手に食器を洗います。

まじめで明るいこの子が、なぜ勉強に苦しまなければならないのか・・・。勉強は楽しいもの。勉強は美しいもの。流されずに「自分のこころ」で歩くんだ。ありがとうね。